

日本語における主題の省略・非省略について

一人称代名詞をめぐって

曾 儀婷

広島大学大学院国際協力研究科大学院生
広島県東広島市鏡山1丁目5番1号

1. はじめに

日本語学習者の人称代名詞の使用については、これまでその使用過多が指摘されてきた。村上(1996)は、日本人の日本語の文章および会話では、一人称の主語が、多く省略されるが、日本語学習者は、一人称代名詞の「わたし」を過多使用するという結果も報告している。また、筆者が調査したところ、台湾の日本語学習者の「一人称代名詞」の使用過多の原因は、使用している教科書の影響ではないという結果になった。さらに、使用過多は主語の使用場面に多いことが判明した⁽¹⁾。

このように日本語学習者の人称代名詞の使用過多は自明であるにもかかわらず、日本語教育には、人称代名詞の使用規則が、授業にしっかりと取り込まれているとはいえず、学習者の独学によるところが大きい。このことは日本語習得上において問題であると考えられる。

日本語の一人称代名詞はよく省略されると言われている。しかし、一般的に新しい話題が導入される時は、それが誰のことはっきりさせるために使用される。また、一つの文においては一人称代名詞が文の成分として機能する。これには主題や目的語などが考えられる。本稿ではその主題の機能を持つ一人称代名詞のみ見る。

主題の省略について、畠(1980)は、日本語教育、特に中級・上級においては、主題の省略をもっと積極的に取り上げるべきであると批判している。また、甲斐(1993)も、アンケート調査の結

果から、上級レベルの学習者が、主題の省略と非省略の現象に気づいていないことを明らかにした。しかし、台湾の日本語学習者にとって、必ずしも人称代名詞の使用過多の問題が解決されているわけではない。それは単純に台湾の日本語学習者を対象とした研究が少ないというだけではなく、もう一つの問題点、すなわち日本語母語話者はどんなルールに従って、日本語の人称代名詞を省略したり、省略しなかったりしているのかが、まだはっきりと解明されていないためである。

本稿では、これまでの日本語の主題の省略、非省略に関する先行研究を検討し、研究の問題点や、今後の研究の方向性を提示したい。

2. 主題の省略可能と省略不可能の条件

2.1 主題の省略

これまでの研究者が解明した主題の省略に関する成果を順次追って整理して行きたい。まず、次の二文は、いずれも主題が省略される。いわゆる三上章(1960)の「X八のピリオド越え」である。三上(1960)は「X八」がピリオドを越えて、次の文まで提題の役割を果たすと指摘する。

(1) 父は茶の間へは入らなかった。[父は]⁽²⁾隣
の間に座った。

『三上(1960:117)』

(2) 私は議論をして、勝ったためしが無い。[私
は]必ず負けるのである。[私は]相手の確
心の強さ、自己肯定のすさまじさに圧倒せ

られるのである。

『Yano (1977)』

『久野 (1978: 103)』

三上 (1960) の指摘を引き継いで久野 (1978) は、機能主義という観点から主題の省略現象を談話法規則として明示的に整理し、同じ主題が、第一文から第二文に引き継がれる時、第二文では主題を省略することができることを主張する。実際、筆者の手元にある小説の中の一節を例に考えてみる。

- (3) その頃、私は乗りものに乗ると、必ずうたた寝をしていた。[私は]内職にラジオの台本を書き始めていたので寝不足だったのだろう。それでも[私は]体の中に目覚時計が入っているのか、下りる駅の手前になると必ず目を覚ました。

『父の詫び状』

- (4) 吾輩は猫である。[吾輩は]名前はまだ無い。[吾輩は]どこで生まれたか頼と見当がつかぬ。[吾輩は]何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。

『吾輩は猫である』

(3) は、最初に文の主題「私は」が明示され、それ以降の文では、主題の省略がなされている。主題「私は」は、ピリオドを超え、以降の文においても主題と解釈される。次に、(4) は、主題「吾輩は」が、後ろに配列された複数の文を繋げ、それらの文にまとまりを与えている。この4例は、いずれも三上 (1960) が「X八のピリオド越え」と呼んだ現象である。助詞「は」によって示された主題が、いくつかのピリオドを越え、一連の文を、一つの主題を持つひとまとまりの文章としてまとめあげるのである。

- (5) この絵は、家内が遊び半分に、三日で描いたんですがね。オフィスの壁に[この絵を]掛けておいたら、偶々訪ねてきた画家の板谷さんが、[この絵を]とても誉めてくれましたね。[この絵に]女の悲しみが漂っていると言うんですよ。

また、Yano (1977) は (5) の文を使って、ある「概念」が一度談話のトピックとして現れると、その後の談話において、それがいかなる文法的役割によって再び現れるとしても、省略可能であると指摘し、トピックの重要性を訴える。しかも、矢野は、その概念の第一生起と第二生起の間に⁽³⁾、より高い卓立を持つ他概念が介在しても、それが談話のトピックである限り、主題は省略可能であるという。

砂川 (1990) も、主題の省略が許されるのは、省略されたものが何を指し示しているのかが読み手に理解可能である時と述べ、その主題の省略を可能にする条件として、「構文的条件」を提示する。

- (6) 四人が二階から降りてきたときに、万梨子が子走りに居間へ入ってきた。[は]セーターの上に急いでレインコートを羽織ってきたという感じで、彫りの深い顔には化粧気も無かった。
- (7) “女も手に職をつけなければいけない”それが父の口癖だった。その教えを忠実に守ったのは、邦子のほう。[は]大学の時に英検の一級を取った。[は]ついでにガイドの資格を取り、二年ほど航空会社に勤めたが、今はフリーのガイド業通訳業を営んで、なかなか忙しい。

『砂川 (1990: 17)』

(6) のように省略された主題が指し示す人物が、直前の文で言語的に示されている場合は、省略された主題の復元確率は高いという。さらに、(7) のような、いわゆる「分裂文」で、表層では主語の位置を占めていなくても、基底で主語の位置を占めていれば、続く文でそれが省略された場合、主題の復元可能性は極めて高いと砂川 (1990) はいう。また、現場指示の省略条件については、甲斐 (1995: 2) が談話構成上、「話者の感情表出、聞き手に対する質問など、誰についてのコメントかはっきりしているもの」、「発話の場面から、話者と聞き手がともにそのコメントが

誰, 何についてのものかははっきりわかっているもの, 「眼前の出来事, 状況の描写で, 誰, なにについてのコメントかはっきりしているもの」といったタイプがあるとも述べている。

また, 寺倉 (1980) は, 先行文と後行文, 二文間に意味的断絶のない場合が, 後行文の主題が省略されると指摘する。(2.3.1 参照)

2.2 視点からみた省略

省略現象や, 省略文の分析において, 「視点」という概念が用いられることがある。これについて検討してみたい。久野 (1978) は, 「視点」という観点から省略の現象を論じ, 省略にかかわる以下の条件を導き出した。

(8) 異主題省略条件

「Yハ... X... . Xハ... .」という二つの主題文が連続しているとする。その時, 「Xハ」が省略できるのは, 話者の「視点」が, Yのそれと完全に一致し, しかも, 第二文もYの「視点」からの記述である場合に限られる。

例文をあげてみていこう。以下(9), (10)で検討する。

(9) 太郎は花子を病院に見舞った。〔花子は〕思ったより元気であった。

(10) 太郎は病院に花子を見舞に行かなかった。〔花子は〕太郎がいつ来ると首を長くして待っていた。

『久野 (1978 : 108)』

(9) では, 主題の省略が, 可能である。しかし, (10) の主題の省略は, 不可能である。その要因が「視点」である。(9) では, 太郎が花子に対する直接的な気持ちについて, 自分の「視点」から見た記述であるが, (10) では, 太郎と花子が対等の位置にあるため, 「視点」が変わり, 非文となったのである。しかし, (9) の例が, 物語文のみに起こり得る現象であり, 話し言葉で(9)のような省略は, 第一文の主題が, 一人称代名詞に限られてしまう。

また森田 (2002) は, 日本語の理解には, 「表現者の視点」の分析が欠かせないと主張した。例えば, (11) の例文をもとに, 「表現者の視点」について考察したい。

(11) お婆ちゃんが死んで悲しい。

「表現者の視点」から考えた際に, (11) のような感情形容詞を使用する文の主題は, 一人称でなければならない。「私は祖母の死を悲しむ」のような自分を客体化した冷たい表現は避けられ, 直接的な, 素直な「悲しい」という自分の気持ちを述べるのが普通である。

ゆえに, 森田 (2002 : 3 - 4) は, 日本語では, 基本はあくまで自分が基点で, 自分のまわりにある世界の事物や現象といったものを「自己の視点」で把握するのだという。そして, 自分を外の世界の一員として対象化するのは, 他者との「対比」や, 特に自分を何らかの意味で「取り立てる」場合に限定されているという。「私は~」の日本語は「特別の状況」での発話であって, 普通は自分を対象化して文面に提示することをしない。省略現象と「視点」の概念の関連性は, 今後の考察において重視すべき重要な指摘といえよう。

2.3 主題の非省略

2.3.1 寺倉 (1980) について

寺倉 (1980) は主題の非省略の分析に, 「非継続」の概念を持ち込んだ。ここでの非省略は「使用すべき所なので, 使用しているパターン」である。寺倉 (1980) によると, 文と文の間に意味的な断絶が生じている場合に主題は省略されない。すなわち, 二文間に意味的断絶のある場合というのは, 後行文が, 先行文の主張または前提とは直接関係のないことから表現する場合で, 後行文の主題が省略されない。また, その意味的断絶のパターンは, 例えば「会話の内容が急に飛ぶ場合」, 「既に談話に現れた指示物に関する情報を与える文の場合」, 「節が挿入される場合」などがある。

2.3.2 砂川 (1990) について

主題の非省略には, 「使用すべき所なので, 使用しているパターン」と「使用しなくてもいいの

に、使用しているパターン」の二つが考えられる。砂川（1990）は、前者を「主題の義務的な明示」、後者を「主題の非省略」と名づけ、分析している。

2.3.1.1 「主題の義務的な明示」について

(12) こう独り言を言いながら、マルイギンは銃に弾をこめ、ここで行われた悲劇のすべてを知るため、あたり一帯を歩き回った。マルイギンは倒れた紅松のそばにバンドの切れたライフル銃を見つけた。安全装置がかかっていた。

『砂川（1990：22）』

なぜ二つ目の「マルイギン」は省略しないのであろうか。砂川（1990）によると、この談話の第一文の表す内容（マルイギンがあたり一帯を歩き回ったこと）と、第二文の表す内容（マルイギンがライフル銃を見つけたこと）に、「時空間的なギャップ」が存在し、ゆえに、談話の「境界」が設定されたためであるという。砂川（1990）は、第二文が第一文の主題を維持することは困難なため、再び「は」を用いて主題を明示することを、「は」の「主題の維持機能」と呼んだ（砂川、1990：22）。同じ主題が、次の文で維持されることが困難な場合は、主題を再設定するのである。ちょうど、三上の「Xハピリオド越え」の条件を反対にした場合といえれば分かりやすいだろう。砂川（1990）は、「は」の「主題維持機能」が困難な場合について、「時空間的なギャップ」のほか、「他の登場人物の介在」、「脈絡の不整合」、「語り様式の変化」、「視点の変化」などを取り上げている。

2.3.1.2 「主題の非省略」について

(13) 僕はなによりも、助かった、と思った。勝っちゃんの言うとおり、いま家じゅうがそのことでゴツタ返しているのなら、僕は帰りが遅れたことを誰にも気づかれずにすむからだ。

『砂川（1990：23）』

この談話には一貫して一人の登場人物（この場

合は「僕は」）が、主題となっている。そして(12)では、二つ目の主題が省略しにくかったのに対して、(13)では、二つ目の主題を省略したとしても、談話は自然である。ただし、再度使用して問題があるわけでもなく、必ずしも不自然とはいえない。

日本語では、復元が可能な主題は、省略が可能である。しかし、復元できない主題が、義務的に明示されなければならないのに対して、復元可能な主題の場合、その主題の省略は、全く義務的なものではない。省略するかしないかは、あくまで書き手の自由な選択に委ねられている。

では、なぜ(13)の二つ目の「僕は」が、省略されずに再び使用されたのであろうか。砂川（1990：22）は、第二の文に再び主題を設定することによって、書き手はその談話になんらかの「境界」を設け、その談話をより小さな単位に分割しようとしたためではないだろうかとしている。

2.3.3 話題の変換について

談話の焦点が主題にある場合、もし新しいトピックに変換してしまったら、話し手は聞き手にトピックが変換したことを知らせ、聞き手と新しいトピックを共有しなければならない。そのためにも、主題を明示する必要があると述べている（雨宮・林部：1993，甲斐：1995，神崎：1994）。

2.3.4 清水（1995）について

清水（1995）は「叙述の種類」と文連続の観点から、評論文や随筆などの資料を分析し、主題の非省略について考察した。その内容を簡単にまとめてみると以下のものである。

(14) 「叙事型」文連続

属性叙述文 事象叙述文（連鎖）

主題省略

事象叙述文 事象叙述文（連鎖）

主題省略

「解説型」文連続

属性叙述文 属性叙述文（連鎖）

主題顕現／主題省略

「[叙事 解説]型」文連続

事象叙述文 属性叙述文（連鎖）
主題顕現

ただし「解説型」が「叙事型」への評価を表す場合は主題省略される。

『清水（1995：653 - 654）』

2.4 問題点の提起

これまでの主題の省略と非省略に関する研究は、主題の省略に関するものが多く、非省略に関するものが少なかった。

主題の非省略は、「使用すべき所なので、使用しているパターン」と「使用しなくてもいいのに、使用しているパターン」の二つに分けられる。たとえ非省略に関する研究があっても前者の方が多く、後者の場合に関してはほとんど説明されてない。砂川（1990）が後者について考察したが、分析に使用する資料が小説であった。小説というジャンルが語り手の特有の手法があり、文体的な要因などの関連もあり、複雑な要因が絡み合っていると考えられるため、妥当であるかどうか一つの問題点と考えられる。したがって本稿では新聞読者の投稿したものを分析対象とする。

また、清水（1995）が以上の問題点を提起し、主題の非省略を解明しようとしたが、清水の説明では解決できない（15）のような文章例を見つけた。

- (15) 私はかつてある事業所の面接で、年配の事務長から「君は県内の有名進学高校から聞いたこともないような大学へ入ったと、高校では勉強を頑張らんかったんか」と尋ねられたことがある。その時、私は「そう言われると、確かに頑張らなかつたと言えるかも知れない。でも実際、何をどの程度までやれば、頑張ったことになるのだろうか」と、心の中で禅問答のようなことを繰り返しながら憂うつな気持ちになった。

『朝日新聞』（2003年1月7日付）

したがって、主題の非省略に関する研究がまだ不十分であるといえよう。

3. 主題の機能を持つ一人称代名詞について

これまで主題の省略・非省略について整理してきた。ここでは、既存の研究でわかった主題の省略、非省略の理由や規則を使って、実際に次の例文を分析する。なお、分析に使用した例文は『朝日新聞』の投稿欄に掲載されたものである。

- (16) 私は、目だけはましだと思っていた。ところが、加齢とともに遠近二つの眼鏡を持つ羽目に。それもここにきて一段と進んだように感じて、以前一度だけお世話になったことのある隣の眼科医院を訪ねた。

診察室に入ると、医師が「こんな見つけました。朝日新聞です」と言って、カルテにクリップで留めた新聞の切り抜きを示してくださった。それは昨春、本欄に載った私の投稿「地元の食材で早春の気満喫」だった。私は大感激。以前に診ていただいた時、「花作り」のことを少しお話したが、あれから何年もたち、多くの患者さんに出会っておられるのに、私の名前を覚えていて拙文を見つけ、それを残してくださったとは……。

『朝日新聞』（2003年12月30日付）

(16)の文例では、第一段落の文頭で「私」が一度現れただけである。それ以外の文では、「私」は省略されている。つまり冒頭の「私」が、ピリオドを越えて「二つの眼鏡を持つ」、「病院を訪ねた」、「診察室へ行く」にまで影響を及ぼし、文をまとめる働きをしていることがうかがい知れる。つまり、それは一人称代名詞の「私」が、主題として提示された事を意味しており、「文と文をつなげる」という主題の基本機能が作用しているのである。

次に第二段落の「私」について見てみたい。ここでは、前半に新聞記事の説明が述べられ、後半になって、自分の気持ちを述べようとしたために、再度「私」が提示されている。

- (17) 「私には借金なんてない」と思っていたが、

一つだけあった。短大に通うため借りた奨学金だ。卒業してちょうど10年目の昨年、無事返済を終えることが出来た。毎年、年末が近づくと返済用の振込用紙が送られて来たので、学生時代のことを思い出すいいきっかけになっていた。

「借金をしてまで大学に行きたくない」と思っている人がいたら、ぜひもう一度考え直してほしい。確かに卒業後も返済を続けるのは精神的にも負担があるかもしれないけれど、返済の期間にはまだ学校との繋がりがあろうと悪い気分はしなかった。

私は10年の歳月をかけて、ゆっくり卒業した気分である。在学中は奨学金を借りていることがコンプレックスだった自分が、こんな穏やかな気持ちになれるとは思わなかった。

『朝日新聞』(2003年1月5日付)

(17)では、冒頭の「私には」と最後の段落の始め「私は」は、両方とも省略が不可能である。ただ、省略しても復元が不可能ではないので、省略は全く不可能というわけではない。しかし、この談話内では、省略されずに再び主題として提示される方が、より自然だと思われる。以下、その理由を考えてみたい。

冒頭の「私には」をあえて使用した理由は、おそらく、書き手が自分自身の話であることを示すからである。つまり「私」という話題を導入するために、使用したのであろう。そして、「私には」の使用が、読み手などの他の人との「対照」を示すことにもなるので、結果使用したのである。

次に、最後の段落の「私は」を分析する。これは、単純に、「主題の再提起」と解釈することもできるが、「視点の転移」からも説明ができれば。すなわち、最初の段落は、自分が奨学金を借りて学校を卒業し、さらにその借金である奨学金も返済が完了したという二つの心境を述べたものである。そして、次の段落では、その自分の視点から離れ、他の人に視点が変わってしまう。そこでは一般の人の借金に対する感じ方が述べられている。そして、最後の段落では、再び自分の視点に戻り、自分の気持ちを吐露するのである。

これは、「視点の転移」によって、人称代名詞「私は」の再提起の必要があったために使用されたのであろう。

(18) 私は高校で30年以上数学を教えてきました。その間、生徒たちから何度も、「こんなことを勉強して何の役立つんですか?」と聞かれました。そのたびに自分なりの説明をしてきましたが、すっかりと納得させられませんでした。

わが家は兼業農家で、わずかな農業所得があります。毎年の確定申告では、市役所で計算してくれる標準所得というものを利用して申告し、所得税を追加して納めてきました。

今年からは青色申告しようと思い、勉強し始めました。今までやったことのない減価償却費の計算などには数学の知識が必要なのが分かります。計算してみると、わが家の農業経営は思っていた以上に赤字で、確定申告によって税金が戻ってきます。

自分で申告しない限り、税金は戻ってきません。減価償却や簿記の知識、申告の仕方などを知らないと損をするのです。

私は生活する上で役立つ数学の実例を、気が付くたびに集めてきました。今度の経験も早速書き加えたいと思います。役に立つだけでなく得をすると知ったら、生徒も興味を示してくれるかもしれません。

こんな例を「役に立つ数学実例集」というホームページにまとめています。

『朝日新聞』(2003年1月8日付)

同様に、(18)では、文頭の「私は」と文末の「私は」に、二つの人称代名詞が用いられている。最初の「私は」は、「は」の働きにより、後ろの文章に結束を与えている。さらに新しい話題を導入するという「話題の導入機能」としても働いているといえる。つまり、「私は」は、「確定申告によって税金が戻ってきます」まで繋がるのである。それは、書き手である「私の視点」が、そこまで物語って続いて行くということを意味している。

次の「自分...」の段落は、書き手が「自分の視

点」から、一般的な人が考えた客観的な事実を表現し、つまり第三者の視点に転移して書いたものである。そして、次の段で再度「自分の視点」に戻ったため、「私は」を再提起したのである。

4. 今後の課題

第2節では、日本語の主題の省略と非省略のそれぞれの条件について、これまでの研究を概観してみた。そして、第3節では既存の研究の成果をもとに、「一人称代名詞+は」の省略可能性と、省略不可能性についても検討をした。一人称代名詞が主題の位置に現れる際、それらの省略・非省略のルールが主題の省略・非省略のルールと類似性があったことが分かった。今回取り上げた例文には、既存の解釈が当てはまるように思われる。

しかし、これまで主題の省略・非省略の研究において、主題になる要素が区別されていない。すなわち、主題となる名詞のもの、例えば、無生物の名詞であったり、有生物の名詞であったり、それぞれの種類がはっきりと分けられてない。また、主題の位置に現れるものが人称代名詞のみではなく、普通名詞や固有名詞、指示詞なども現れやすいことに注意しなければならない。

これまで、主題の省略・非省略を研究する際、人称代名詞がひとつのジャンルとして扱われたことがなかった。人称代名詞は独立した一つのカテゴリーとして分析すべきであろう。

「はじめに」の部分で述べたように、日本語学習者による一人称代名詞の使用過多という現実があり、それに対して、一人称代名詞の省略、非省略の学習は、学習者の独学、経験に委ねており、日本語教育の問題としては決して見過ごすことは出来ない。そこで、人称代名詞の中でも一人称代名詞をまず取り上げたい。

日本語における一人称代名詞には「私」以外に、「僕」「おれ」「わし」など数多くの表現がある。さらに、会話の場面においては、話し手は聞き手との関係を考え、自分のことを言及する時に親族名称や職業名や肩書きなどのほか、どの人称代名詞を使用するかを選択する。現時点では、小説を分析対象とするものが多く、日本語学習者が日本語を習得する際に使用するテキストと文体や文の

構築手法などについて差異があると考えられる。ゆえに、学習者が普段に使用する教材に近いものを分析し、主題の省略・非省略をあらためて見る必要がある。不特定多数の人に語る場面（例えば作文も）となれば、その選択肢が少なくなり、自分のことを言及する時は一人称代名詞の「私」に限られるだろう。本稿は「私」のみを扱うために、新聞の読者投稿欄を分析の対象とする。

しかしながら、以上のように省略、非省略の研究を概観したものの、日本語学習者にどのように説明するかということまで研究は進んでいない。

そもそも日本語母語話者の有する主題の省略・非省略の規則、条件の構造がまだ解明されていないことは事実である。これまで、小説や評論、随筆などの資料を分析し、主題の省略・非省略を考察した研究が多かった。しかし、実際に日本人がどのように一人称代名詞を使用しているかこそまず検証しなければならないのである。したがって、それを検証するために、筆者はまず「アンケート調査」を実施したい。特に日本語学習者が特徴的に間違える主題の機能を持つ一人称代名詞、すなわち「私+は」を取り上げ、分析を行う。そして最終的には、日本語教育の現場における一人称代名詞の省略、非省略についての教授法を構築したい。

アンケート調査の資料は、表紙、調査内容あわせて全部で10枚である（添付資料参照）。調査用紙のはじめに、「回答者の個人情報」、「回答手順」、「解説」などを記した。質問で使用する文章は全部10篇である。10篇の文章の間にはそれぞれ関連性がなく、ただ調査の客観性を求めるために数多くの文章と人称代名詞を復元させた。文章中の「私+は」には「網掛け」と「網掛けでない」ものがある。網掛けの部分は原文に一人称代名詞「私+は」が、元々あったものであり、網掛けでない部分は、調査のため意図的に復元させたものである。ただし、実際にアンケートを行う場合は網掛けをしない。

網掛けの部分は元の文例にあったものであるため、省略不可と判断する被調査者が多くなることが予想される。逆に、網掛けのない部分は、元々の文章にないものであるため省略の可能性が高く

なるのも予想されるだろう。しかし、これまで日本語母語話者がどのようなルールに従って一人称代名詞を使用しているかについての研究がまだないため、予想通りの結果が出ると断言できない。もし予想に反する結果が現れるのであれば、それは主題機能を持つ人称代名詞の特性に繋がる可能性がある。例えば、話題の転換や導入などの部分（網掛け）について、省略できるという回答が多ければ、その理由が文章の構成上の問題と考えることは難しくなるであろう。

注

- (1) 曾 儀婷 (2004) 「台湾の日本語学習者の作文に見られる日本語の一人称代名詞の使用について」『国際協力研究誌』10(2)を参照。
- (2) 筆者が補充したものである。括弧内は主題が省略されている箇所である。
- (3) 卓立の一番高いのは談話のトピックである。以下、文の主題、主語、目的語...その他の順に低くなる。

謝辞

本稿の作成にあたり、深見先生からは懇切丁寧に指導を頂きました。厚くお礼申し上げます。

参考文献

雨宮朋子・林部英雄 (1993), 「日本語における“談話主題”の省略に関する実験的研究」, 『横浜国立大学教育紀要』33, 265-280

甲斐ますみ (1993), 「談話における発話の解釈 省略という現象をめぐる」, 『東呉日本語教育』16, 173-191

(1995), 「省略のメカニズム 談話の構造と関連性および聞き手の推論を中心に」, 『岡山留学生センター紀要』3, 1-18

神崎高明 (1994), 『日英語代名詞の研究』, 研究者出版

久野 暲 (1978), 『談話の文法』, 大修館

清水佳子 (1995), 「「NP八」と「 (NP八)」」, 『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』, くろしお出版

砂川有里子 (1990), 「主題の省略と非省略」, 『文芸言語研究 言語篇』18, 15-34

寺倉弘子 (1986), 「談話における主題の省略について」, 『月刊言語』, 15(2), 99-105

三上 章 (1960), 『象は鼻が長い』, くろしお出版

村上京子 (1996), 「『わたし』の使用過多について」, 『日本語研修コース修了生追跡調査報告書』2, 129-136

森田良行 (2002), 『日本語文法の発想』, ひつじ書房

畠 弘巳 (1980), 「文とは何か 主題の省略とその働き」, 『日本語教育』41, 198-208

Yasukata Yano (1977), *Intersentential Pronominalization: A Case Study From Japanese and English*, Thesis (Ph.D.)—University of Wisconsin-Madison

出典

『朝日新聞』

夏目漱石 『吾輩が猫である』, 岩波書店

向田邦子 『父の詫び状』, 文春文庫

Abstract**Omission and Non-Omission of the Theme in Japanese
—Focusing on the First Personal Pronouns—**

Yi-ting Tseng

Doctorate Candidate, Graduate School for International Development and Cooperation,

Hiroshima University

1-5-1 Kagamiyama, Higashi-Hiroshima, 739-8529, Japan

It is well known that the theme of a sentence can be omitted under certain conditions in Japanese. Several researchers propose some rules which appear to govern the omission of the theme. In this research note I try to indicate whether those rules are applicable to the first personal pronouns that have the thematic function in Japanese. It can be said that the rules are applicable, not all of them but almost of them. However, those researches on the omission/non-omission of the theme do not take into consideration the types of nouns or noun phrases which function as a theme, such as proper nouns, demonstrative pronouns, and so on. The first personal pronouns in Japanese have their own characteristics so that they should be dealt with independently.

There are several terms other than the first personal pronouns to refer to the speaker him/herself in Japanese. In a monologue, however, it seems that almost solely the first personal pronouns are used. Therefore, the first thing to do is to make clear how the native Japanese speakers use the first personal pronouns functioning as a theme in a monologue. For this purpose, I plan to conduct a questionnaire survey (attached to this article).

(添付資料)

人称代名詞の使用に関する調査

この調査は、日本人の日本語における人称代名詞の使用事態に関するアンケート調査です。この調査によって、日本人がどのように人称代名詞を使っているかを知る資料にしたいと思います。

お忙しいところ大変恐縮ですが、アンケート調査にご協力くださいますようお願いいたします。記入して下さった回答を言語学の視点で分析し、調査者の論文の一部として取り入れさせていただきます。この資料は研究以外で使用することがないため、記入者の情報がよそに漏れる心配はありません。

なお、アンケートの回答に入る前に必ず1ページの「あなたの情報」について記入してください。そして「回答方法と注意点」もよく読まれてから始めてください。

まずあなたの情報を教えてください。

性別：男性・女性
 年齢：20代・30代・40代・50代・60代
 ご職業： _____
 現在地： _____ 県 _____ 市
 出身地： _____ 県 _____ 市

回答方法と注意点

この調査では、10篇の文章があります。それぞれの文章の下線部分の語句について、あなたなら、その語句が必要で省略できないと思うか、それとも不必要で省略できると思うか選択してください。必要で省略できない場合は「必要」の欄に、不必要で省略できる場合は「不必要」の欄に を付けてください。

なお下線部分の語句には、それぞれ番号が振ってあります。回答は、文章欄の下の各番号に該当する回答欄に を付けてください。回答は必ずどちらかを考えてください。

例1：

お母ちゃんなんか大嫌いだ！何でお母ちゃんは栄太郎君ばかり可愛がるんだよーっ！！

お母ちゃんは僕よりあの子の方が好きなら、あの子をこの家の子にすればいいじゃないか

： 必要・~~不必要~~・

： 必要・~~不必要~~・

例 2 :

夫：「今晚山田君が来るよ。晩御飯によんだんだ。いいだろう？」

妻：「ええ、それはかまわないけど。山田さんまだ結婚しないの？」

： 必要 ・ 不必要

正しいとか間違いとかはありませんので、直感で判断し、気楽に選択してください。ただし、くれぐれも記入漏れのないようにお願いします。

ご記入していただいた本アンケートは、平成 年 月 日 までに、切手貼付済の返信用の封筒に入れ、調査者まで返送してください。

【文章 1】

我が家は、今英語のブームだ。昨春、大学を卒業した娘は得意の英語を生かして翻訳の仕事に就いた。主人は娘に刺激され、英会話教室に通って語学力を磨き直している。夏休みに二人で行ったカナダでは、身ぶり手振りの私を尻目に、主人は勉強成果を発揮し、楽しそうに会話していた。

その姿に私も発奮、英語が話せたらもっと世界が広がって楽しいだろうと思って、英会話教室に通い出した。30年ぶりだから、授業は緊張の連続で、先生が何を話してるのかほとんど理解できず、質問されても勘を頼りに答える始末。

私は英語はちっとも進歩しないのだが、我が子と同年代のクラスメートに交じって受ける授業は張りがある。私は楽しく、何よりも前向きでいられる自分がうれしい。

私は生涯教育なんて無縁と思っていたが、ずっと続けていきたいと思っている。そして、私は今夜もかすむ目をこすりこすり、辞書を片手に宿題と悪戦苦闘している。

今年 2 月には私は友達とオーストラリアに行く計画。私は絶対、コアラに英語で話しかけたいな。

回答欄：下線 ~ について「必要」か「不必要」を選択してください。

必要 ・ 不必要

必要 ・ 不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

【文章 2】

02年は1月2日の私の誕生日、実家での乳がんの告白から始まりました。1人で暮らす実家の母も運悪く足を骨折しており気がかりでしたが、私はすぐに治療をうけるため、翌日には帰らざるをえませんでした。

新春早々からの抗がん剤、4月の手術、術後の抗がん剤、放射線と、治療はほぼ9カ月にわたりました。その間、私は友人たちが毎日のようにメールや電話で元気づけてくれたおかげで、無事に乗り切れました。

過剰ないたわりや慰めでなく、淡々とした日常の会話が支えになりました。「頑張って」と言われるより、私と話す病院や日々の生活を一緒に笑ってくれたことが、どれだけありがたかったでしょうか。副作用の脱毛さえも、笑いで切り抜けられたことは病気にもよい効果があったように思います。

私は放射線治療が終わってから2週間後には、母とカナダに旅行し、大自然を満喫。私は治療中のことが遠い出来事のように、体力・気力が戻ったことを実感しました。乳房切除の身ですが、温泉デビューも済ませました。

治療に明け暮れた年が終わり、また誕生日が巡ってきます。年齢一つぶんより、たくさんの物を与えてくれた年でした。母がケーキを注文し、待っています。支えてくれたみんなに感謝を込めて、私はにぎやかに楽しく祝おうと思います。

回答欄：下線 ~ について「必要」か「不必要」を選択してください。

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

【文章3】

我が家の正月は変わっている、と私は思っている。若い頃はなぜこんなややこしいことをしないといけないの、もっと簡単にしようよ。私は温泉に行った方が楽しいよなどと文句ばかり言っていた。

元日は、まず夫が午前五時ごろに起きて若水をくむ。といってもただ水道の蛇口をひねるだけだが。神棚と仏壇に灯明をあげ、お茶を供える。次に、洗面所に新しい歯ブラシとタオルを人数分そろえ、家族を起こす。みな、目が覚めていても夫の音がかるまで起きてはいけない。

身支度を整えると、居間で黒豆、香の物、梅干しを少しずつ食べ大福茶をのみ、座敷へ移動する。次に、盆に盛られた8合の米のまわりにならんだ薄切りの餅、昆布、スルメ、みかん、干し柿を一つずつ懐紙に取る。その後やっとおとそにたどりつく。そこで初めて「明けましておめでとうございます」とあいさつを交わす。これだけの手順を日の出前に終えなければならないと、夫は毎年奮闘している。

数年前やっとな温泉に行くことになって大喜びしていたら、元日の儀式をきちんと済ませてからの出発と言う。おせちも例年通り作らねばならず、私はまったく休養にならなかった。

しかし35年も続けていると、私もこの儀式がないと気持ちが悪いと思うようになったから、人間で不思議なものである。

回答欄：下線 ~ について「必要」か「不必要」を選択してください。

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

【文章4】

私は「細かいなあ」と言われることがある。普段の生活は、質素につましくしている。節約は、一人ひとりができると思っている。

例えば、使わない電気を切り、ガスの種火は消しておく。まだ使えるものは捨てず、新しいものは買わない。

私は自分の体を使ってできるものは手作りする。

何かいただいたお返しは、ほとんど手作りの野菜、漬物、小物などにしている。私のケチの基本は、再利用することと、手作りということになる。

私はお金を惜しむケチにはなりたくない。私は無駄をなくし、モノの命をいとおしむケチでありたい。

それと、ケチをするにも目標を持つことが大切である。私は目標を持ってケチな生活をする、心が貧しくならないように思う。私はお金をためるために心が貧しく、卑しくなることだけは、まっぴらゴメンと思いながら、日を送っている。

回答欄：下線 ~ について「必要」か「不必要」を選択してください。

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

【文章5】

神奈川小田原市に住む父が倒れた。命は取りとめたものの、重い障害が残り、今は病院でお世話になっている。大正生まれの厳しい父、あまり甘えた記憶はないが、とても情に厚く、私が名古屋に嫁いでからも体に気を付けるようにといつも気に留めていてくれた。

私はふっくらとしていたほおがこけ、ひとまわり小さくなった父に会うと、胸が苦しくなって目をそらしてしまいそうになる。でも、私は涙をためて声をかけようとする父の姿に、喜ぶことを少しでもしてあげたいと、そんな気持ちにもなる。

ある日、私は肩を痛め、整形外科に行った。私が病院に入ると、父と同世代の方が大勢いた。私は空いている席を見つけて座り、ふっと顔を上げると、そこには父そっくりの体つきで、おまけに父の愛用のものそっくりのスウェットスーツを着ている方が、向こう向きに座っているのが目にとまった。その瞬間、涙があふれ出てきた。私は嬉しいとか悲しいとか思うより先に出た涙に私自身驚きながら、それを止めることができなかった。そして、

私はその背中にすり寄り、「お父さん」と声をかけたくなった。

私はここまで育ててくれた父の背中に、40歳にしてはじめて甘えてみたくなった。私は「今度の週末会いに行くね。風邪引かないでね」と心の中で言うことで、やっと涙を止めることができた。

回答欄：下線 ~ について「必要」か「不必要」を選択してください。

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

【文章6】

月に1度は東京から帰ってきていた末っ子の足が、このところ遠のいていた。社会人になって5年。全国を飛び回る仕事にも慣れ、忙しいのだろうと思っていたら、そうばかりでもないらしい。

「電話ではやらしいもんで、メールばかり」とぼやく妻の話では、末っ子はメールでお金を無心してきたのだ。私が「最近帰らんのも、金欠病ってわけか」と自分の青春の頃を思い出して苦笑すると、妻は「じいちゃんからの小遣いがなくなったから」と言う。

私は納得した。孫やひ孫にめっぽう甘かった「じいちゃん」は末っ子にとって父以上の「スポンサー」だったが、昨春、なくなったのだ。

そんな末っ子が、初めて勤めた年の冬のボーナスからプレゼントしてくれた5万円が今も私の口座にそのままある。私は「あの定期、おろしてやれよ」と父親ぶったら、たちまちにして妻や長女らから「甘やかしたら、あかん！」と反発された。

私は師走にかかってきた末っ子の電話に「足代、あるか？」と聞くと、「リッチ、リッチ」と威勢が良かったのはボーナスが出たからだ。

回答欄：下線 ~ について「必要」か「不必要」を選択してください。

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

【文章7】

私は「いっぺんに二カ所は行けへんから」と、大学生の娘に頼まれ、去年は正月早々、デパートへ「福袋」を買いに行くはめになった。

開店30分前に着くと、先客は約30人。しかも話している内容から察すると、こちらの目指すブランド服が目的の人は少ない様子。そのうえ、私が学生時代にバイトをしていたデパートなので内部の地理には詳しく、これは楽勝と思った。

そして開店。一斉にダッシュしてエスカレーターを駆け上がり、2階で右に回って……。勝敗は1分後にはついた。結果は負け。

少し言い訳させてもらおうと、限定10袋とは私は知らなかった。しかも、開店前、先頭に並んでいたカップルは2個ずつ取っていたのだ。さらに私は、並んで買うものという先入観もあった。福袋はダッシュして、ワゴンの物をつかんだ者が勝ち、とは私は初めて知った。

兵庫県・西宮神社のえべっさんで、開門と同時に一番札を求めて駆け抜ける「福男選び」にも似ていると私は思った。これは新年の運試しにはちょうどいいかもしれない。というわけで、私は今年はひそかにリベンジを狙っているのだ

回答欄：下線 ~ について「必要」か「不必要」を選択してください。

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

【文章8】

自転車でもならどこまでも。私は郵便局巡りをしていますが、東京という所は何と郵便局の多い所だろうと感心してしまいます。

私は1局100円貯金をしながら走ります。23区のうち、近くの区は全局完了。だんだん遠くなり、11月にはとうとう、大田区まで行きました。自転車で、ですから自分でもあきれています。片道25キロ以上はあるでしょうからねえ。

第一京浜を走っていると東京国際女子マラソンの横断幕。国立競技場から平和島折返し。私はその手前から走ってきてその後、さらに遠い大田区の田園調布局まで行って来ました。

行きは局に寄りながらなのでいつの間に行ってしまうのですが、私は帰りはいつも「何でこんな遠い所まで来てしまったんだろう」と後悔の涙を流しそうになります。ひたすらペダルを踏みしめ2時間以上。「もう行くのはやめよう!」と思ってもついつい.....。

私は12月には、最後の区の練馬区にも足を踏み入れましたよ!私が行ったのは全部で581局になりました。

回答欄：下線 ~ について「必要」か「不必要」を選択してください。

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

【文章9】

私は昨年4月、短大の看護学科に入学した。専業主婦だった私が外へ出ること、生活は一変した。

特に影響を受けたのは、6歳、4歳、1歳の息子たち。手作りおやつを食べ、一緒に砂場で遊んだり、折り紙をしたり、ゆっくり過ごしていた毎日が、入学後は朝から夜まで余裕がない。私は何かにつけ「早く」と言い、追い立てるように寝かしつける。夫は仕事が忙しくて、帰宅するのは大抵、寝かしつけた後だ。

先日、私は「やっぱり無理かなあ。ひとりで全部やらなくちゃならないなんて」と、弱音を吐いた。すると長

男が「何で？そんなことないよ。僕がお手伝いするから大丈夫だよ」と言ってくれた。

一瞬、私は言葉を失った。思わず、ぎゅっと抱きしめた。6歳になったばかりの彼の中にそんな気持ちがあるなんて。入学間もない頃、私は「お母さんが学校に行くのイヤ？」と聞いた時も、今も、同じ質問にうなずく彼が、応援してくれるなんて。

私は子供にしわ寄せがいくのがつらくて、何度退学しようと思ったかわからない。けれど子供のためにも自分のためにも私は何とか3年、乗り切りたい。

小さな子供を抱えた母親は何かを始める際、「子供がいるから無理」と思いがちだ。でも本当は「子供がいるからこそ頑張れる」こともある。私はまた一つ、大事な事を子供に教えてもらった。

回答欄：下線 ~ について「必要」か「不必要」を選択してください。

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

必要・不必要

【文章10】

私の至福の時間は、中学生や高校生の頃の勉強の「復習」です。

私が学校で学んだのは主に戦後ということになりますが、終戦直後からしばらくはモノの無い時代で、教科書も当然備えは不十分でした。私は中学では英語の教科書が無かったと記憶しています。

また、教える側は代用教員が多く、例えば、日本史の先生は薬屋の主人であり、先生になるための教育を受けていないので話が難しく、授業がなかなか理解できなかった、というお粗末さでした。

情けないほどモノの無い時代でした。ところが現在は、教科書や解説書、問題集は書店にあふれ、印刷は鮮明でカラーもふんだんに使われ、内容は過剰と思われるほど懇切丁寧です。

この「宝の山」を見過ごす手はない，というわけで私は中学の英語や日本史を問題集などで復習しています。

「知ることは楽しみ」で，しかも安上がりで，精神の健康にもこんなに良いことはありません。中高年にお薦めです。

回答欄：下線 ~ について「必要」か「不必要」を選択してください。

必要・不必要

必要・不必要

調査はこれで終わりです。ご協力ありがとうございます。

最後にもう一度「あなたの情報」と「必要・不必要」の回答に記入漏れがないか確かめてください。